

平成 24 年 3 月 24 日

於：湯島聖堂

中齋塾フォーラム創立五周年記念式典 塾長講話

今日は足もとの悪いなか、遠い所からお越し戴きまして有難うございます。木内信胤先生に「心にもない事は言っはいけないよ」と言われていましたが、流石に今日の雨は激しく降ったので、心の片隅に大変だろうなどの思いがありましたので、言わせて戴きました。

木内信胤先生のお名前を申しましたので、木内信胤先生が「悟り」についてお話しされたことに少し触れたいと思います。先生は著書『國の個性』の中で、「今の世の中、分析が多すぎる。分析はあくまでも総合が前提条件だ」と書かれておられます。

私は毎月、主治医から薬を戴いております。二、三個の頃はよかったです、いつの間にか薬が五、六個増えました。結果として言えることは身体のアチコチが悪くなっているということです。身体の診断についても、細かく分類された各専門家は多いけれども結果をまとめあげる総合力がありません。

木内信胤先生流に言いますと、総合的直観力というのは非常に深いものがある。何の訳か分からないが、ハッと気づき何かが分かる。これを直観と言い、東洋の心でいえば悟りと言います。先生は、悟りを「ひらめき」と言われました。先生は、「分かるというのは、どうしても分かりたいと強く思い、願望をもつ。その強い願望を持つ事によって、ある日ハッと分かるか、また、ある日突然に氣がつく」と言われました。

安岡教学では「悟る」という言葉は馴染み深いと思います。例えば、海岸線を見ています。太陽が昇る前は、一面真っ暗で何も見えません。だんだん太陽が昇って来ると、はっきり姿形が見えてくる。それが悟るという心の働きです。

中齋塾フォーラムが始まった頃は、論語の解説や素読の時間をとっておりませんでした。会員の皆様からの要望が強くなり、今ではだいぶ時間を割いてお話をしています。その輪がどんどん広がって来ていると感じます。それだけ皆様の学びたいという気持ちが強くなったのだと思います。

私が昔、教えて戴いた石川梅次郎先生のお宅に伺った時に、先生の部屋は本の蟻地獄のようだと感じました。前後左右に天井まで本が斜めに積まれ、その真中に先生が居られる。

私とお喋りをしている時にも、先生は後ろにうず高く積まれている本の山から、何の迷いもなくお目当ての本をピタリとすぐ見つけ出しておられました。その石川梅次郎先生は、「金儲けばかりしていると、人間そのうち心が枯れてくる。歳をとると、もう一度学校に戻って勉強をしたくなるものだよ」と言っておられました。又、「還暦を過ぎたら社会に恩返しをなさい。そういう年代になったら自覚をなさい」とも言っておられました。私も還暦が近づくにつれ、そういうものかなと思ひ至り、五年前に中斎塾を開いた次第です。

先日、二松学舎の群馬OBで書道展を開きました。私以外は書の専門家ばかりで、内容の濃い書道展でした。私は自分の考えている言葉で「通貨経済は終焉、これからの世の中は知足経済」という字を書かせて頂きました。

人類最大の発明と言われているお金による決裁という仕組みは、終わりを迎えると言われています。これからはお金で決済するのではなく、お金にかわる何ものかが世界全体の決裁の仕組みを決めてゆくだろうと思っています。お金にかわる何ものかはまだ誕生していませんが、これから出て来るとしています。候補としては、介護の世界のポイント制、汗を流した分だけポイントを貰えるような仕組みがあります。いずれにしてもこれからは、通貨経済から別の仕組みへ変わってゆく状況だと思っています。

震災から学ぶこと

覚悟を決める とは、どういうことかお考え戴きたいと思います。

木内顧問の講演の中で「人間は生きる本能を失っているのではないか」という言葉がありました。我々は生きていく本能をどんどん失っていると感じています。人類が淘汰されている時代に入ってきていると感じます。

今年の三月初めに、NPO法人健康医療開発機構主催の『震災後一年 健康と医療の再生に向けて』というシンポジウムに参加させて頂きました。その内容に愕然としたものが二つほどありました。

南相馬市の市長さんが来られてお話をされたのですが、その中で政府や官僚はとんでもないという話がありました。「私共の地域は二〇キロ圏内として緊急時避難準備地域と指定され、その結果、住んでいる住人が居るにもかかわらず物流が止まりました。ガソリンや食糧、酷いのは救急車やドクターヘリが来なくなりました」と言っておられました。読売新聞から取材の申し入れがあったそうですが、本社から南相馬市は危ないから入るなという達しがあって行かないとのことで、わざわざ市外に出掛けて取材を受けたそうです。市長さんは、「政府は信用できないから一ヶ月間は自分達で生き延びる対策をしよう！」と

言っておられました。まったくその通りだと思いました。

また、東北大学の先生がヒヤッとするような話をされました。「東日本大震災当初、学生がボランティアで動いていましたが、あっという間に人数がふくれあがって、千人規模になってコントロールがきかなくなってしまった。そのためにボランティアの学生が遺体と直面する回数が増えて、だんだん心を病んでしまった。結果、二名の学生が自殺をしてしまい、大学として反省している」とおっしゃっていました。ボランティアというのは非常に良さそうに思うけれども、ある程度の人が増えた時には大きな問題が出る。その時には自殺者も出るのだという事を感じました。このような話はあまりマスコミには出てきません。

自衛隊中央病院のお医者さんも同じような話をしておられました。自衛隊員は遺体に直面する場面が多過ぎるので、事前にメンタル面の指導をする為のチームを作り、山形県に本部を置いて一所懸命各地を回って歩いたそうですが、やはり自衛隊員も二名心を病んで自殺をしてしまったとの事でした。

南相馬市の市立病院の先生の話もありました。原子力発電所が爆発した時には南相馬市立病院には二七四名の職員がいましたが、翌日には八〇名となり、他の職員は逃げたそうです。四五名いた外部委託職員も、翌日はゼロになってしまった。何故そんなに人数が減ったのかというと、舛添要一さんの書かれた『日本政府メルトダウン』という本にも出てるように、日本政府が情報を隠し、物事にストップをかけていたからだということでした。

以前フォーラムでもお話しましたが、中斎塾の大野参与が大震災の後、厚生労働省から無料で沢山のマスクを提供して欲しいと依頼され、一億円相当のマスクを提供する約束をし、用意しました。しかし厚生労働省は自分達で取りに来ると言ったのにもかかわらず、被災地の事情もあり輸送できなかつたのか、結局引き取りには来なかつた。

そういった類の話は沢山あります。政府は人様に物を頼んでも後始末をしない。シンポジウムのパネラーの中には政治家もいました。元厚労大臣と文科省の副大臣です。彼らの話は愚痴ばかりで酷いものでした。

覚悟を決めましょう

大震災後、中斎塾の会員さん達も独自に色々と動かれていました。世間の人達は動いていたのです。なのに肝心の政府官僚は、そういった民間の動きの足を引っ張るばかり。命を救うのではなく、命を縮める動きしかしていなかつたのではないかと……。私はそのような印象を強く持ちました。

これから近々に大きな震災が起きると思いますし、強毒性の鳥新型インフルエンザも起きると私は思っています。覚悟を決めましょう と申しますのは、その様な事態が起きた時、覚悟を決めていないと身動きが出来ないからです。

例えば、ガイガーカウンターは御存じだと思いますが、私の持っているガイガーカウンターで先程この周辺を測りました。今日の朝日新聞では、いわき市が0.16マイクロシーベルト、会津若松市は0.12マイクロシーベルト、水戸が0.07マイクロシーベルトでした。湯島聖堂を測りましたら、0.08マイクロシーベルトでした。

自分でこういうものを持って測る、自分で自分の命を守らなければいけない時代が来たのです。私は今、笛を持ち歩いています。サイレントタイム用の笛です。建物が倒壊して身動きがとれなくなった時、笛を鳴らしたら見つけてくれる可能性が高まります。何か一つでも、こういった準備をされるとよいでしょう。実際に自分で体験した人は、それが知恵になり、動けます。ぜひ皆様も体験者の話を聞いて、ご自分に活かされるとよいと思っています。

もうすぐ目の前に、生きるか死ぬかという事態が来ると覚悟を決めて戴きたい。覚悟を決める というのは、**自分の死を意識する時期が近いと思って対策をする**ということだと考えて欲しいのです。

次に、お金の問題から見てみましょう。

政府に対する抗議ばかりですが、年金に関して、日本政府は完全に詐欺をしていると私は思っています。もともと年金は積み立て方式で始まったわけですが、いつのまにか賦課方式というペテンが始まった。

年金も源泉徴収も、元は戦費調達のために作られた仕組みです。源泉徴収が始まった頃の資料を読みますと、戦争が終わったら止めると言ったものが、今では税金を取り立てる柱になっています。ですから政府は信用できないと感じます。

何を言うかではなく、過去に何をやったのかということが肝心なのです。六十数年前、日本政府は何をやったのか。私は国会図書館に行き、昭和二十一年二月十七日付の新聞五紙を調べました。その当時、日本政府が実行したのは金融封鎖です。国民に銀行にお金を預けさせて、凍結をし下ろさせないようにしました。又、富裕税などは最高税率九割も課税しています。

昭和二十一年四月十七日の新聞には、お金を国民から召し上げて、それが返って来る時にはインフレが凄まじく進んでいるから使いようがない、という内容の表現があります。日本政府がしたことは、紙幣の紙くず化です。

私は今後、同じようなことが起こり得ると思っています。今、持っているお金はそのうち使えなくなる。インフレがハイパーインフレに変わった時には、当然そうなります。

私は以前、デフォルトをした国々を見て廻りました。経済破綻を起こして最も悲惨だと感じたのはロシアです。ロシアは或る日突然デフォルトが起きて、二千万人くらいが餓死しました。現地に行って体感して来ました。トルコに行った時には、凄まじいインフレが起きて、昨日まで中小企業の社長夫人だった人が、家政婦をして亭主を養っているという話を聞きました。男性は環境の変化になかなか適応が出来ないけれども、女性はそのような時でも強いですね。覚悟を決める というのは、**実際に何かを失うという事を覚悟する**という意味です。

私は日本もデフォルトが近いと考えています。会社が倒産をすると、負債は発表されている数字よりも三倍くらい多い数字が出てきます。今、国の借金は一千兆円と言っていますが、これは嘘ばかりだと思っています。私は二千兆円はあると思っていますが、もしかしたら訳の分からないものが色々出てきて、三千兆円ぐらいになっているかもしれません。

覚悟を決める というのは、何かを無くしてもよい、**何かを無くすと腹を括って、人生の一大事と正面から向き合う事**だとも思います。

生き残るために・・・

申しましたように、日本は風前の灯だと思っています。

ブータン王国の国王夫妻が来日された時に通訳をされたベマ・ギャルポさんが書かれた本の中で、「日本は他の国から狙われているのを知らない。日本国民は気が付いていない」とあります。国家は政府と領土と国民、この三つ揃わないと成立しません。今の政府はあまりにも無能です。領土は侵略され、日本の土地は各所で外国に買われています。国民を守るという視点でも、日本国は拉致された国民を取り返せないような酷い状況下です。日本の政府は自分たちの領土も国民も守れないと他国から公然と云われているのに、問題視しない。大変に困ったことだと思います。それを頭に入れて、これからの日々を生き残れるよう自助努力をして戴きたいと思います。

現在は、人類淘汰の時代に入ったと感じています。

文明法則史学から見ると、西洋文明が八百年のサイクルで誕生し衰退しています。文明の転換期は二百年、今まさにその転換期に入っているから、一つの国が潰れる、或いは世界の仕組みが崩れるということは当たり前なのです。

資本主義・社会主義は終わり、お金で物事を片付ける時代は近々終わると思います。こ

れからは、助け合いの時代に入ると思います。「知足」というものの考え方が、これからの世の中を動かしてゆく。それを進めなければ人類は滅びる、五分と五分の時代に入っていると感じます。木内顧問のお話の通り、人類が生き延びる確率は五割。そう思って戴いて、覚悟を決めてこれからの生き方を本氣になって見据えて欲しいと存じます。

危ない、危ないと言うばかりではなく、自給自足や「足るを知る」という具体的な何かを始めなければいけないのです。私も少しずつ新しい動きを進めております。皆様も目の前のもの、少しずつで結構ですから始められると良いと思います。本日がそのきっかけになってくれればと存じます。

本日は有難うございました。皆様のご多幸をお祈り申し上げて、私の話を終了とさせて戴きます。